令和元年八月投句

窓閉めてまわる夕立一軒家
雷鳴に動き固まる幼児かな
それなりの甘さと甜瓜を売る

節子

送火の灰は君のと同じ色
慣れてきし霊棚作り手は老ひぬ
田水守り畔は銀河に沿うてをり

勝利

静かなる余生を得しや霧深し
デイケアの休みの昼のビールかな
秋暑しもういぢわるは言はぬこと

光子

なつかしき父の筆跡星月夜
好きなことしていてもなほ秋暑し
見えもせぬ乳を吸ふ嬰稲の花

真理子

砂利道の乾きし音や夏越祭
射手は汗見せず三的射ぬきをり
丑三つの空に流星つづけざま

由紀子